

餌生物の違いと生物の受ける影響



Fig.1 蒲生干潟全景(合成)

環境改善の可能性

Fig.1は干潟全景の合成写真である。この日は潮位が高く(+20cm程度)台風接近の影響もあるが、前回調査時と比べ海水が干潟全体に広がっている。(レポートNo.6参照)。前回の調査時には還元的な環境が観察されたが、新鮮な海水が補給されれば干潟の環境は生物の生存に適したものになると考えられる。前回とは異なり硫化水素臭も感じられなかった。

は3cm程度の稚魚であった。今回採集した大型の個体が特異な個体なのか、あるいは今後成長した個体が数多く採集されるのか注意深く調査を続けて行きたい。なおイシガレイはイソシジミの入水管を選択的に捕食しており干潟の環境変化の影響は次に述べるマハゼ等とは異なることも考えられる。

成長したイシガレイ

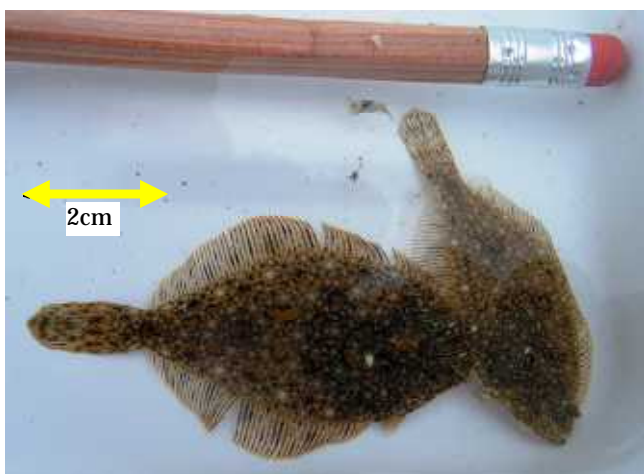


Fig.2 イシガレイ稚魚

Fig.2はFig.1の で採集したイシガレイである。前回調査時に採集した個体が3cm程度であったのに対し、より成長した個体を採集することができた。同所で手網を使い1mほど海底をこすると、1,2匹の稚魚が確実に採集できる程度の密度で生息していた。しかしそれら

餌生物の不足



Fig.3 マハゼ

Fig.3は投網で採集したマハゼである。本来円筒形に近い体型であるが、大変やせており震災後の餌の不足が推測される。マハゼは肉食性の強い魚で、多毛類・甲殻類等を捕食している。Fig.3には甲殻類も写っているが干潟の海底に生息するこのような餌生物が極度に減少したことが推測される。この日の調査ではクロダイ(約10cm)も採集できたが、このような稚魚を成長させる「海のゆりかご」としての機能は現在は失われていると考えられる。